

新商品分野でのソフト品質保証プロセスの構築事例

久木 達也
株式会社リコー

tatsuya.hisaki@nts.ricoh.co.jp

要旨

本稿では、プロジェクトシステム事業(PJS 事業)の新規立ち上げに伴い、新たなソフト品質保証プロセスを構築した事例を報告する。

事業ニーズに確実に応えるために、従来からの品質保証プロセスを適用した場合の課題を洗い出し、個々の課題に対し、商品分野の特性や組織の実力を考慮しながら、商品開発／品質保証プロセスを検討した。

この活動の内容と実施結果、及び、得られた知見について述べる。

1. はじめに

弊社では、2010年頃から従来からの基盤事業である複写機/複合機/プリンタ事業に加え、複数の新規事業の立ち上げてきた。

もともと、基盤事業における商品開発／品質保証のプロセス／環境が存在しており、これを新規事業に適用することにより、ある程度安定した品質／生産性で開発できる状態になっていた。

しかし、新しい商品分野で同じプロセスを適用すると、プロジェクト目標に対して大幅な納期遅れが予測されたため、商品分野の特性に合わせてプロセスを見直すこととした。

プロセスの見直しに当たっては、従来の組織の役割から見直す必要があるため、関係部署(PM 部署、品質保証部署、設計部署)が合同で検討にあたった。

2. プロセス見直しの方針について

基盤事業では、多機種並行開発を行っており、既存プロセスは、プロセスに応じて組織を編成し、各組織が最高のパフォーマンスを発揮できることを意図して設計されていた。新規参入したばかりの PJS 事業では多機種並行開発に最適化されたプロセスは重く、適さない。

そこで、品質を阻害しない範囲で、可能な限り品質保証を前倒しすることで、TAT 短縮を目指した。(図1)

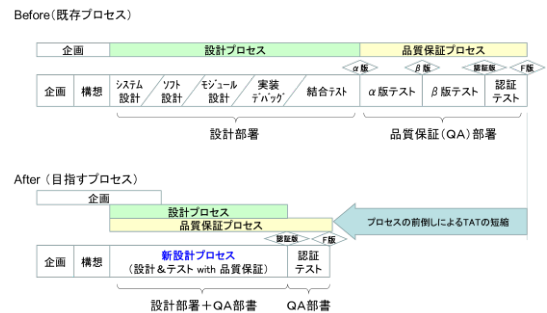


図1 プロセスの見直し

これを実現するために3つの改善を行った

- ① 品質保証の早期開始
- ② 設計プロセスの効率化
- ③ 段階的なリスク解消

(これら施策の詳細についてはスライドを参照。)

3. 実施結果

1機種目では、多くの課題は残したものの、当初の目的であった納期短縮は達成できた。現在まで機種の世代を重ねる度に改善することで、品質と生産性が安定してきており、基盤として定着したと評価している。

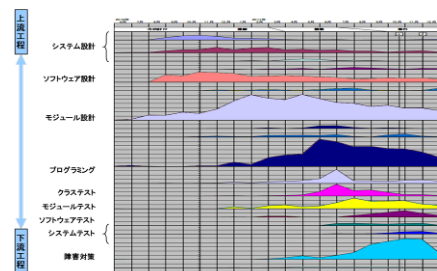


図2 開発工数の推移

4. まとめ

組織や新しい商品分野の特性に合わせた品質保証プロセスを構築する方法に関する事例を述べた。